



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ネリー・ザックスの詩の構造：ユダヤ的思考原理としてのメトニミー
Author(s)	吉川, 千穂
Citation	独語独文学研究年報, 34, 19-38
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32440
Type	departmental bulletin paper
File Information	2.pdf



ネリー・ザックスの詩の構造

— ユダヤ的思考原理としてのメトニミー —

吉川 千穂

0. 序論

20 世紀半ば、ナチスドイツによる迫害を逃れ、スウェーデンに亡命したユダヤ系ドイツ語詩人、ネリー・ザックスの詩は概して難解である。深い叙情性をもって訴えかけてくるザックスの詩作品は、詩人独特の語彙選択、統語の欠落、多様な語結合をもって複雑さを極め、彼女の生きた、崩壊と混迷の時代を映し出しているかのようである。「塵となったものたちの痛みをこの世で知り尽くし、光で照らすこと」、¹ザックスは自身の創作の使命をこのように語っているが、彼女は詩の言語でいかにしてその使命を果たしていったのだろうか。

1933 年にヒトラーが政権を掌握して以来、ベルリンの地で 7 年間、ザックスがユダヤ人弾圧に耐え、スウェーデンに亡命したのは 1940 年。ジェノサイドの生き証人としてザックスが初めて詩集『風に書かれた墓碑銘』を完成させたのは 1943 年のことである。ここからユダヤ詩人としてのザックスの歴史が始まるのであるが、亡命地スウェーデンで執筆された 4 つの詩集をまとめた第一詩集『死の棲家で』は 1947 年に出版されている。国家社会主義による「私たちの民族の筆舌に尽くせぬ受難の震撼の下で」²これらの詩が成立し、このジェノサイドこそ、ザックスの詩の根源的テーマであることを、ザックスは主に亡命後の 1943 年から 47 年にかけて友人らに宛てた書簡のなかにつづっている。第二次大戦の勃発、親類や友人らを含む同胞ユダヤ人の収容所移送、ベルリンにおけるザックス自身への強制労働の招集。彼女はこれらをノルウェーとデンマークが占領された 1940 年の出来事と記しているが、³こうしたナチスドイツによる迫害が、詩作へと直結するザックスの身近な時代経験であったことがわかる。⁴ザックスは同書簡で、ユダヤの芸術家はユダヤの血

¹ Sachs, Nelly: Briefe der Nelly Sachs. Hrg. von Ruth Dinesen. Frankfurt am Main 1984, S. 209. ヨハネス・エドゥフェルト宛書簡より。以下 Sachs: Briefe (1984) と略記。

² Sachs: Briefe (1984) S. 33. 1943 年 1 月、モーゼス・ペルガモント宛書簡より。

³ Ebd., S. 46. 1946 年 1 月、マフレート・ゲオルグ宛の書簡より。

⁴ こうした政治的文脈から、ザックスは国家社会主義によって外側から押しつけられたユダヤ性を、マルティン・ブーバーらの思想を通じ探求することとなる。1947-48 年冬、彼女はストックホルムの大学で行われた、フーゴ・ベルグマンによるブーバーおよびローゼンツヴァイクについての講義を聴き、深い感銘を受ける。ブーバーへの傾倒はおそらくこのあたりから始まっており、同時にユダヤ・キリスト教の対立を超えた、宗教への普遍的理解を示すようになる。ブーバー/ローゼンツヴァイク訳『イザヤ書』やローゼンツヴァイクの著『救済の星 (Der Stern der Erlösung)』、ブーバーのハシディズムに関する書物への熱心な取り組みが、主に 1945-47 年の書簡から読み取れる。Vgl. Sachs: Briefe (1984) S. 85ff.ただし、ブーバー等のユダヤ思想の試作への影響はザックス本人の発言に

の声にもう一度耳を傾けなくてはならない、と訴えている。「私が若い人たちに願うのは忘れないということ。私たちユダヤ人は地上のあらゆる民族のため、これを記憶にとどめなければならぬ」。⁵以下に、ザックスの第一詩集冒頭の詩を紹介しよう。

*Und wenn diese meine Haut zerschlagen sein wird,
so werde ich ohne mein Fleisch Gott schauen*
Hiob

O DIE SCHORNSTEINE

Auf den sinnreich erdachten Wohnungen des Todes,
Als Israels Leib zog aufgelöst in Rauch
Durch die Luft –
Als Essenkehrer ihn ein Stern empfing
Der schwarz wurde
Oder war es ein Sonnenstrahl?

O die Schornsteine!
Freiheitswege für Jeremias und Hiobs Staub –
Wer erdachte euch und baute Stein auf Stein
Den Weg für Flüchtlinge aus Rauch?

O die Wohnungen des Todes,
Einladend hergerichtet
Für den Wirt des Hauses, der sonst Gast war –
O ihr Finger,
Die Eingangsschwelle legend
Wie ein Messer zwischen Leben und Tod –

O ihr Schornsteine,

よって否定されている。ザックスは「あなたの用いる形象は、ほとんどがハンディズムに由来しているのですか」という 1968 年のアンケートに対し、「いいえ。まったく、断じてありません。ハンディズムを研究したことなど一度もありません。私の人間としての姿勢が、今まで読み私を慰めてくれたいくつかのものと、内的な関連をもっていたただけです」と答えている。Vgl. Richerd, Lionel: *Dem Geheimnis nahen*. In: *apropos Nelly Sachs*. Frankfurt am Main 1997, S. 108. ザックスは聖書などを通じて、亡命前よりユダヤ・キリスト教への取り組みを行っており、本稿においても、ザックスのユダヤ性は、国家社会主義によるユダヤ人弾圧という社会的背景、聖書にみられる文体と思考原理の影響関係等のうちに求められており、ブーバーらの思想との関連を問題にするものではない。

⁵ Sachs: *Briefe* (1984) S. 92. 1948 年 3 月、ワルター・ベレントゾーン宛の書簡より。

O ihr Finger,
Und Israels Leib im Rauch durch die Luft!⁶

そしてこの己の皮膚が打ち破られるならば、
我は肉体を持たずして神を見ん
『ヨブ記』

おお、立ち並ぶ煙突よ
巧みに建立された死の棲家の上
イスラエルの肉体が煙となって
空へ解き放たれたときー
ひとつの星が煙突掃除人として彼を捕らえた
それは黒く化した
それともあれは日の光であったのか？

おお、立ち並ぶ煙突よ！
エレミヤとヨブの塵のための自由の道よー
だれがおまえたちを考案し石の上に石を重ね
煙でできた亡命者らのために道をつくったのか？

おお、死の棲家よ
招くようにしつらえてある
かつて客であったその家主のためにー
おお、おまえたち指よ
入り口の敷居を置きながら
生と死の間に横たわるナイフのごとくー

おお、おまえたち煙突よ
おお、おまえたち指よ
そして煙となったイスラエルの肉体は空に行く！

この詩の成立時期は 1945 年から 46 年にかけての冬である。第一詩集に含まれる詩群『煙となって空を行くイスラエルの肉体』に収録されており、詩群名と同様の表現が詩中に繰り返し現れる。ザックスは、この詩群に現れる「イスラエルの肉体 (Israels Leib)」とい

⁶ Sachs, Nelly: Fahrt ins Staublose. Frankfurt am Main 1961, S. 8. 以下、同詩集からの引用は FS008 (FS の後の数字はページを表示) などと略記。

う表現が「ユダヤ民族の運命」を指していることに、書簡中で何度となく言及している。⁷ 作品においても、ナチスドイツによって迫害されたユダヤ人は、イスラエルということばにおいて表され、旧約の時代に始まるユダヤ民族の受難の歴史の上に重ね合わせられている。„O DIE SCHORNSTEINE / Auf den sinnreich erdachten Wohnungen des Todes“という詩冒頭の二行から、強制収容所と火葬場の煙突を連想することは難くない。また、エレミヤやヨブといった旧約の固有名の使用、冒頭に引用された『ヨブ記』の一節は、「イスラエルの肉体」と旧約聖書の結びつきの強さを示すものである。意味論レベルにおけるこうしたザックスと旧約の関連については、先に挙げた書簡集における発言をはじめ、他の多くの研究者がすでに指摘している。しかし、後に論じるように、両者の結びつきは、こうした意味論的影響関係にとどまるものではない。ザックスが旧約に支配的なパラレリズムの技法を大々的に踏襲しているという点で、旧約とザックスの強い関連性を形式レベルにおいても指摘することができる。後に詳述するように、旧約に由来するこのパラレリズムは、メトニミーというユダヤ的思考を反映する重要な言語形式の場である。彼女の詩のことばがいかに深く旧約に依拠しているかがここに認められるのであり、ザックスのユダヤ性の根源は、こうした詩の具体的な言語使用の中にこそ求められる、と筆者は考える。

1. 先行研究の批判的考察

これまで日本でほとんど論じられることのなかったネリー・ザックス（1891-1970）の研究は、主として戦後ヨーロッパにおいて細々と行われてきた。ザックスに関する二次文献は無数にあるが、エッセイ風の書評の類が大勢を占め、「学術的」と呼びうる、作品の深い批判的考察を含んだ研究は1970年に入って初めて現われたといつてよい。1970年に発表されたパウル・ケアステンとペーター・ザーガーの両博士論文⁸が、ザックスのメタファーを幅広く取り上げた最初の研究であり、これらは、その後のザックス研究の発展の契機となる基盤的研究と位置づけられる。この二つの論文以後、書簡集の編纂、伝記といったザックスの基礎文献の整備とともに、ケアステンを踏襲したメタファー研究がザックスにおける中心的な研究テーマとなっていっただのである。⁹

ケアステンの分析するメタファーの数の多さには驚くべきものがある。彼の研究は「言

⁷ Vgl. Sachs: Briefe (1984) S. 52.

⁸ Kersten, Paul: Die Metaphorik in der Lyrik von Nelly Sachs. Mit einer Wort-Konkordanz und einer Nelly Sachs-Bibliographie. Hamburg 1970 と Sager, Peter: Nelly Sachs. Untersuchungen zu Stil und Motivik ihrer Lyrik. Bonn 1970 を参照。

⁹ 例えば Hardegger, Luzia: Nelly Sachs und die Verwandlungen der Welt. Frankfurt am Main 1975 や Motte, Magda: Der Verwandlung sichtbarstes Zeichen. Die Schmetterlingsmetaphorik im Werk der Nelly Sachs. In Nelly Sachs. Neue Interpretationen. Hrsg. von Michael Kessler / Jürgen Wertheimer Tübingen 1994, Rudnick, Ursula: Post-Shoa Religious Metaphor. The Image of God in the poetry of Nelly Sachs. Frankfurt am Main 1995 等。

語材料とその機能的使用の意味論的分析が、詩的性質を決定する第一歩である」¹⁰という認識の下、メタファーを意味論的な分析対象とする。ザックスの言語使用をすべて紹介できないことをその都度断りながら、解釈をできるだけ排しながら文例を提示し、ザックスのメタファー使用のあり方に通時的な展望を与えている。しかし、ケアステンのメタファー研究の手法には問題点もある。彼は、ザックスの様々な詩における共通した言語使用について、主として語の共起性に基づいて複数の「並行個所 (Parallelstelle)」を引用し比較している。例えば、ケアステンは人間の居住に関わるモノを表す語彙素の共示的 (コノテーション的) 意味作用を、以下の文例を並置させて行っている。

Aber in der Nacht,
wenn die Träume mit einem Luftzug
Wände und Zimmerdecken fortziehen,
beginnt die Wanderung zu den Toten.

FS139

しかし夜、
夢が風とともに
壁と天井を連れてゆくとき
死者たちへの彷徨が始まる。

In den Träumen aber fliegen die Fische in der Luft
Und ein Wald wurzelt sich im Zimmerfußboden fest.

FS153

夢の中ではしかし魚たちが風の中を飛ぶ
そして一つの森が部屋の床にしっかりと根を下ろす。

ケアステンはこうした文例を並置した後、これらの隠喩過程において「日常の生活空間から不可視の宇宙という別の空間への変容 (Verwandlung)」¹¹が表現されている、というテーゼを出す。なるほど、第一の文例では *Wände*、*Zimmerdecken* という生活空間を形成する語が *Träume* や *Nacht* という言葉と共起している。次の文例では、確かに *Zimmerfußboden* が同じ詩テキスト内で *Träume* と共起している。しかし、これだけで、日常的次元から別の超越的次元への変容を表しているという命題は引き出され得るだろうか。第二の分析例を挙げよう。ケアステンは、「抽象概念」のカテゴリーに属する生と死の神秘的統一のモチーフの分析として、*Tod* およびこれと同じ語場に属する *Sterben*、

¹⁰ Kersten (1970) S. 5.

¹¹ Kersten (1970) S. 129.

Toten、tot を生や誕生に対する概念として位置づけ、20 の文例に現われる Leben、Tod の語に下線を引いている。だが、こうした文例の並置作業の後にコメントが一切付されていないのである。生や死を意味する語の共起を指摘しただけで、それらの統語関係や意味論の関係性に一切言及することなしに、それらが「神秘的な統一」を遂げるモチーフを形成しているといえる根拠はどこにもあるまい。この二つの分析例をみても、各々の引用文中にはケアステンの命題に沿ったメタファーらしきものが認められるはするものの、厳密にいかなる基準でそれら二つの語の間に意味の創出作用が観察できるのかが曖昧であることがわかる。ケアステン最大の手法的欠陥がここにある。つまり、意味的な並行性のみられる文例を多数挙げながら文脈内でメタファーを指摘するのはよいが、単に同じ文脈中に別個の語場に属する二つの語が共起しているというだけで、両者が統語・意味論的にどう関連しているかが明示されていないために、特定の語を抽出しそのメタファーの意味を引き出す作業が極めて恣意性を帯び、根拠と説得力に欠けるのである。ケアステンの方法的誤りは、文法等ことばの形式的側面の観察を排除して語彙レベルの議論に終始し、語の関係性の記述を怠った点にある。ケアステンを継承するその後の研究が誰もはっきりとこの点を批判していないのも問題である。他方、形式レベルでのメタファーへのアプローチは Wünsche (1961) や Krieg (1983) が試みているが、今度は、比較的客観的に指摘されうることばの形式的側面がいかに意味に作用しているかを指摘することが、大きな課題となっている。¹²このように、メタファーへの圧倒的な関心に支えられたザックス研究の現状および研究の手法の妥当性を検証すると、メタファー研究の方法、ひいてはメタファーという視点からのみザックスを論じることへの限界が見えるのである。

こうした中、語句の結合関係ならびにレトリックの技法という二つの観点からザックス全詩集のメタファーを研究したザーガー(1970)、類似構造をもつ詩行の並行関係に注目しメタファーの意味的隣接関係を分析したフェアスト(1977)は、意味と形式の両面から言語にアプローチした研究として注目される。ザーガー (1970) は、取り上げたメタファーの数という点でケアステンに及ばないものの、ことばの意味にとどまらず、形式的側面にも注目した分析を行っている。なかでも、最も詳しく論じられているのがザックスのパラレリズムの用法である。ザーガーはザックスの詩の構造の本質的特徴として、統語および詩行レベルにおける文成分の対称性を指摘する。彼によれば、聖書、とりわけ『詩篇』にみられる語や詩行の反復と並行は極めてユダヤ的な文体的特徴であり、ザックスはそれを大々的に踏襲しているという。¹³さらに彼はパラレリズムの技法をザックスの詩の様々な言語レベルのうちに見出し、これらを同義のパラレリズム、隠喩的意味作用を拡大するパ

¹² Vgl. Wünsche, Konrad: Über Nelly Sachs und die Ordnung der Sprache. In: Nelly Sachs zu Ehren. Frankfurt am Main 1961, S. 64ff, Krieg, Matthias: Schmetterlingsweisheit. Die Todesbilder der Nelly Sachs. Berlin 1983.

¹³ Sager (1970) S. 206f.

ラレリズム、ジンテーゼ的パラレリズム、対称的パラレリズムなどと類型化する。¹⁴ザーガーのこの研究は今日に至るまでほとんど注目されていないが、ことばの隣接関係に着目しているという点で、メトニミーという新しい研究の萌芽を含むものである。

フェアスト（1977）もまた、メタファー研究に留まらない観点を含んでおり興味深い。彼女は意味論的に並行関係のみられる文例比較というケアステンの手法を基本的に踏襲しメタファー分析を行っているが、意味と形式の両面から言語分析のあり方を探っている点で、ケアステンと本質的に異なっている。フェアストは、メタファーの意味論的な議論を行う際、ふたつの語結合を含むフレーズをその統語関係から一つのまとまりとみなし、次に続く言語単位との関連や発展を観察する。分析対象語を含む、並行する統語・文法構造のうちに相似性を見出し、意味論レベルにおいてそれらの隣接関係を指摘しているのである。「文法の並行性、統語による結合の欠落、文および詩行末尾の崩壊が示しているのは、メタファーとはただ累積するものである」¹⁵というフェアストの発言もまた、メタファー研究の枠内にありながら、本来メトニミーに属するはずの並行性、隣接性の視点を内包している。

本稿序論で触れたように、ザックスの詩テキストには統語の欠落が目立ち、そのため往々にして語句を最大の言語単位として詩行が形成される。そもそも、ザックスにおいて、語結合の観察またはひとつの命題の内部規定にとどまるメタファーだけを論じていては、難解なメタファーの意味解釈はおろか、詩の全体をとらえることができないのではないだろうか。そこで筆者は、詩行を形成する語句の連なりを、類似する構造の並置として理解し、これらの隣接性に注目することで、詩のダイナミズムに迫ろうと考えたのである。

2. メタファーからメトニミーへ

2.1 一般的なメトニミー概念

実のところ、隣接性とは何か、そしてメトニミー的方法とは何かといえ、現在の言語理論に至っても極めてあいまいなままである。メタファーをレトリックの一技法としてではなく、二つのことばの間に働く意味作用、およびそれに起因する意味拡張の現象として捉える現代のメタファー論は定着して久しいが、メトニミーを意味生産に関わる重要なファクターであると論じられるようになったのはごく最近のことである。メトニミーを支配する隣接性の原理については様々な定義が試みられているが、同時にメトニミーとメタファーの境界のあいまいさ、相互の関連性の強さが指摘されるようになってきている。¹⁶

¹⁴ Siehe Sager (1970) S. 206ff.

¹⁵ Vaeast, Christa: Dichtungs- und Sprachreflexion im Werk von Nelly Sachs. Frankfurt am Main 1977, S. 24.

¹⁶ メトニミーの理論はおおよそ 90 年代半ばから、主にアメリカの認知言語学の領域で取り上げられるようになっていく。メトニミーに基づくメタファー（metonymy-based metaphor）、メトフニミー（metophnymy）といった概念が生産されているように、両者の概念の密接な関連が指摘されている。Barcelona, Antonio: Metaphor and Metonymy at the Crossroads. A Cognitive Perspective, Berlin 2003 や谷口一美『認知意味論の新展開

Metonymie という語は、metá/met-「～を超えて (zu etwas hinüber)」と ōnymá=ōnomá「名前 (Name)」から成り、「言い換える (Umbenennung)」を意味するギリシャ語の met-ōnymía に相当する。¹⁷『レトリック歴史事典』(1992)によると、メトニミーの定義の始まりは、隣接する事柄から表現を取ってきたことばの彩、というものである。現代においてもなお主流である伝統的理解としては、「メトニミーは名前の転用である」という転用理論、および、「もともと Y という対象を表す表現 Ay が Ax によって代置される」とする代置理論がある。どちらも修辞学的な文彩としてメトニミーを問題にしている。例としては、「ゲーテを読む」(著者で作品を表す)、「絹をまとう」(素材で製品を表す)、「一杯飲む」(容器でその内容物を表す)、「ホワイトハウスが黙る」、「ドイツが歓喜する」(場所でその住民を表す)、「中世はそうは考えなかった」(時代でその時代の人を表す)、「パッコスに忠誠を誓う」、「武器を握る」、「王笏を打ちのめす」(人物・事物でその機能を表す)等があり、部分と全体の関係を基盤とするメトニミーの特殊形態は堤喩とも言われる。そして、これらの伝統的理解に代わって、メトニミーおよびその他のあらゆる比喩を、純粋に言語上のプロセスとしてみなすようになったのは、現代の構造主義言語学においてである。ファウコニエールは、メトニミーを「X と Y が語用論的機能によって結ばれているとき、もともと対象 X のことを表す表現 Ax が、対象 Y を表すのに用いられうるような、ズレを引き起こした指示作用」と定義している。¹⁸名前の転用理論にせよ、代置理論にせよ、同一空間において隣接関係におかれた物事がどのような関係にあるかを主たる問題としてきたことは、今日に至っても変わらない。そして、その隣接関係の分類の仕方については、現代のメトニミー理論は基本的に伝統的修辞学を踏襲している。¹⁹例えば、ジョンソン/レイコフは、全体を部分で、製品を製造者で、使用者を使用された物で、出来事や機関で場所を、責任者でその機関を表すなどと規定し、ブランクは、様々なケースをさらに時制、空間、因果に基づく隣接性に分類する。ボンホームは、状況のメトニミーと脈絡関連のメトニミーに大別し、前者に時間的、空間的一致、付属、重さや値段などの査定、素因を分類し、後者に原因、起源、道具、仮定、目的などを分類している。²⁰ただし、現代の言語学

ーメタファーとメトニミー』、研究社、2003 年、などを参照のこと。

¹⁷ Lexikon der Sprachwissenschaft. Hrg. Hadumod Bußmann. Stuttgart 2002, S. 434.

¹⁸ メトニミーの最も古い定義、代置理論、転用理論およびファウコニエールのメトニミー定義については、注 81 に挙げた言語学辞典および以下の事典を参照した。Historisches Wörterbuch der Rhetorik. Herausgegeben von Gert Ueding, Redaktion, Gregor Kalivoda, Franz-Hubert Robling, mitbegründet von Walter Jens, Tübingen, 1992, S. 1196f.

¹⁹ Historisches Wörterbuch der Rhetorik. 1992, S. 1215-1217. 以下、ジョンソン/レイコフ、ブランク、ボンホームの分類についても同辞典を参照した。

²⁰ ヤーコブソン (1973) もまた、メトニミーについて例を挙げて説明している。彼は、選択能力が損なわれていて結語能力が保持されている失語症患者の場合、隣接性が患者の言語行動全体を規定するとし、メトニミーを用いてそのものを指す症例を挙げている。「ナイフとフォーク (knife and fork)」、「パイプを吸う (to smoke a pipe)」といった句が普段対になって用いられることから「ナイフ (knife)」の代わりに「フォーク (fork)」、「パイプ (pipe)」の代わりに「吸う (smoke)」というメトニミーが誘発される。あるいは、あ

では、ある指示対象物を指す表現が本来どの対象物と対応していたのか等というよりも、言葉の指示作用がどのようなズレを引き起こしているか、という問題の立て方に変化している。筆者は、本来の指示対象と言葉の関係よりも、意味作用のズレのプロセスに主眼をおいてメトニミーを論じる立場を取る。

メトニミーはまた、伝統的にも現代の言語学においても、メタファーとの対立概念として理解されている。19世紀以降、現代に至るまで、両者はもはや修辞学的な文彩としてではなく、類似性に基づくメタファーと隣接性に基づくメトニミーという二つの比喻として、意味論的に区別されるようになった。その際、両者の最たる違いは、メタファーが、様々な語義をもつ異なる言葉が結合することによって文脈内に新たな意味が創出され、その類似点において意味を集約させるのに対し、メトニミーは、その隣接性において指示作用のズレを拡大させ、意味の集約とは逆に、多義性への傾向を強めていくことであろう。

さて、先に紹介したメトニミーの特殊形態として、部分と全体の関係という項目を挙げたが、ネリー・ザックスにおいてメトニミーを考えると、まずもっとも目に留まりやすいのがこの種の語彙である。先に引用した詩「おお、立ち並ぶ煙突よ」においても、「死の棲家」と空間的に隣接関係にある「煙突」や、死の棲家の敷居に置かれるとされ、ユダヤ人の生死を選別する「指」などが、部分で全体を表す代置表現として認識されよう。また、筆者作成のコンコーダンスをみても、「目」や「手」といった、身体の部分を表す語が高い頻度で出現していることは、容易に気がつく。また、一般的にメトニミーというとき、名詞や形容詞など、語句レベルでの現象を指すことが多い。しかし、筆者がとりわけ注目するのは、構文をはじめとする様々なレベルの言語間に見られるメトニミーである。後に述べるように、ザックスにおいてメトニミーは語句といった短い言語単位もさることながら、構文や連といった大きな言語単位においても多く観察されるのである。認知言語学の領域では、同一形式に結びつく複数の意味を関係づけることを「多義性のリンク」であるとし、構文の中心的意義の一部分が交替したり新たな意味側面が加わることによって生じるような意味拡張を、メトニミーであると定義されている。²¹谷口（2003）は、構文がその中心の意味にズレを生じさせながら隣接している例を挙げ、次のように分析している。

- | | |
|--|-------------------------------|
| a. ‘X causes Y to receive Z’ [中心的意義] | Joe gave Sally the ball. |
| b. 充足条件が ‘X causes Y to receive Z’ を含意 | Joe promised Bob a car. |
| c. ‘X enables Y to receive Z’ | Joe permitted Chris an apple. |
| d. ‘X causes Y not to receive Z’ | Joe refused Bob a cookie. |

る物「トースト (toast)」の用途とそれを作る道具との関係が「トースター (toaster)」のメトニミー「食べる (eat)」を生む。また「黒 (black)」を思い出せなくて「死んだ人」に対して行うこと、「死んだ (dead)」というメトニミーを用いる、等。ローマン・ヤーコブソン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、『一般言語学』所収、みすず書房、1973年、34-35頁を参照。

²¹ 谷口（2003）147頁。

e. ‘X intends to cause Y to receive Z’

Joe baked Bob a cake.

f. ‘X acts to cause Y to receive Z at some future point in time’

Joe bequeathed Bob a fortune.²²

この六つの隣接関係にある文は、構造的・意味的な類似性がまず先に認識され、そこに差異が発見されてゆくというプロセスを経て並置されている。そしてこの差異化のプロセスは、例 f のあとに構文をどこまでも並置させてゆくことで無限に押し広げることが可能である。差異の中に類似を見出し複数のものをその類似点において一つに集約させるメタファーとは逆に、メトニミーはある同一性を起点として、無限に差異化へと向かうのである。

ここで注記したいのは、ヤーコブソン（1973）がすでに、構文レベルにおける類似構造的なかに隣接関係に基づくメトニミーを見出していることである。ヤーコブソンは、位置的・意味的の両側面における二種類の結合形式、すなわち類似性と隣接性という二つの要素の相互作用が、とりわけことばの芸術において顕著であるとし、聖書の詩、ロシアの口頭伝承に豊富な例を見出している。²³そして、後述するように、この言述のレベルで発見されるメトニミーこそ、メトニミーのユダヤ的性質にかかわるものなのである。

筆者の関心は、客観的な並行構造を示したザーガーの文体研究を、メトニミーの作用の場として読み替え、再検証することにある。ザックス研究史において、これまでザーガー（1970）が後進の研究にほとんど継承されていないのにもかかわらず、筆者がケアステン（1970）と同じくらい重要性をみとめた理由はここにある。ヤーコブソンもまた、詩の比喩の研究が隠喩ばかりに向けられているという実態を痛烈に批判している。確かに類似性の原理は詩の根底にあるが、その根拠は、行と行との韻律的平行性、あるいは押韻する語の音的等価性が認められる場合に限って、意味的類似性と対象性との注意を促すからであり、メタファーだけをみつめる詩の研究の姿勢は「人工的に切断された、単極の図式の刷りかえ」であり「この単極図式は感銘的なことに、二つの失語症パターンのうちの一つ、すなわち隣接性の異常と、一致する。」²⁴ヤーコブソンの言語理論に照らし合わせても、もはや詩における意味生産の仕組みを解明する際に、メタファーという現象だけを観察することが片手落ちであることが明らかである。そして、後に述べるように、ザックスにおいて、メタファー研究を深めていくことが、すなわち、意図せずともメトニミーというもう一つの原理に遭遇することになるのである。

²² 谷口（2003）146 頁～。谷口はメトニミー的構文拡張の例を 1995 年の Goldberg, Andrew: *The Language of Metaphors*, Routledge, London and New York. より引用している。

²³ ヤーコブソンはロシアの民話の一節を引き合いに出し、実際に分析を行っている。「トーマスは独身だ。エレミヤは未婚だ」では、二つの並行的な節の中の述語が相似性によって連結されているとし、主語がともに男性固有名詞であるという形態的な類似性と、二人の主人公という意味的・位置的に隣接関係にある指示内容を伴う、と分析する。ヤーコブソン（1973）40-42 頁を参照。ただし、この分析は、語の対応関係を指摘しているに留まっており、構文レベルにおける意味論的関連性を指摘しておらず、不完全である。

²⁴ ヤーコブソン（1973）44 頁。

2.2 ユダヤ的思考原理としてのメトニミー

「A が B のメトニミーである」といった、これまでのメトニミーの定義は、アリストテレスに始まる「隠喩＝代置」理論と非常に似たところがある。A を B で置き換えるという発想に立つ限り、メトニミーとメタファーの間に本質的な相違はない。しかし、筆者はメトニミーを語と語の関係の問題に終わらせず、並置、隣接、関連性に基づいてより大きな単位の言述の相互関係を規定するものと考ええる。その際、メトニミーをユダヤ的発想の根底にあるものと位置づけ、ユダヤ詩人ネリー・ザックスの言語研究を進める筆者に大きな指針を与えてくれたのが、スーザン・ハンデルマンのユダヤ的言語理論である。ハンデルマンは著書『誰がモーセを殺したか』（1987）において、ユダヤ人による聖書テキストの解釈作業のなかに、並置の論理に基づくメトニミー的思考の働きを見出している。ハンデルマンは、類似する言語構造の並置によって展開する思考の原型を旧約テキストに求め、ユダヤ人にとって神の言葉である旧約テキストこそ、神へ接近する唯一の手段であるとし、無限に繰り返される聖書の解釈作業のなかに、並置の論理にもとづくメトニミーが働いていることを論じるのである。²⁵

ハンデルマンによれば、ユダヤにおいて聖書は神の啓示の一部でしかないという。解釈は未だ明らかにされていない部分、「隠された神」をあらわにする行為であり、それゆえ聖書と解釈のことばは本質的に等しく具体的である。そこでは個別と一般の区分は相対的なものにすぎず、不断に行われる解釈の修正や拡大は、具体的発想の連続として、聖書のことばの具体性を離れることは決してない。そして、その解釈の根本に働いているのが「並置の論理」である。

ここで、ハンデルマンにならい、ユダヤ的思考を特徴づけるこの並置の論理を、ギリシャにおける三段論法と比較することは、ユダヤ的思考とギリシャ・キリスト教的思考の一般的な違いを考える上で有益であろう。すなわち、「すべての人間は死ぬ。ソクラテスは人間だ。よってソクラテスは死ぬ」の対極には、たとえば次のような論理的メカニズムがある。『出エジプト記』では、幕屋の建設に関する記述（2. Moses, 28.8-31.12）と安息日を守るための戒（同 31.13-17）が並置されている。ハンデルマンによれば、これをユダヤ人は、どのような労働が安息日に禁止されているかを正確に教えるためであると考え、「もし幕屋を建てるのにこの三十七種の労働が必要ならば、安息日にはこの三十七種の労働が禁止されることになる」と推論するのである。²⁶このソクラテスと幕屋の例の間にある論理

²⁵ ハンデルマン『誰がモーセを殺したか—現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』法政大学出版局、1987年。ハンデルマンは、このユダヤ的な思考原理について、ユダヤ・キリスト教の対立という神学的背景をたどりながら論じており、本書冒頭で、原始キリスト教がヨーロッパにおける布教の過程で融合することになるギリシャ的思考の典型として、アリストテレスの論理学を批判的に考察している。その後、ユダヤ的並置の論理の最も代表的な解釈規則として「カル・ウェ＝ホメル」の原理を紹介する。

²⁶ 例はハンデルマン（1987）が提示したものである。

的相違は、前者が、ひとつの命題の主語と述語の関係を問題にしているのに対し、後者は、ひとつの命題と別の命題の関連づけに焦点を当てていることである。三段論法では、「すべての人間」という一般とその下位範疇にある「ソクラテス」という個別が述べられており、問題は語のレベルにおける階層関係にある。ところが、ユダヤ的な並置の論理においては、命題中の語と語に階層性はなく、ある個別的命題と別の個別的命題の間に類推が働いており、命題レベルの関係が論じられている。そこでは二種類の個別が一般化されることはなく、二つは並列し、それ以上の上位概念をもたない。そしてまた、これらにさらなる命題を並置し、類推をしてゆくことも可能なのである。これは、ある命題の主語（上記の場合「人間」）と別の範疇にある命題への推論へ発展することを許さないギリシャの三段論法との大きな相違点である。この二つの論法は、命題の立て方という点でも違いを指摘することができる。三段論法では「XはYである」という命題の立て方をするのに対し、ユダヤ的思考においては、「もしXがYならば」という仮定的な言い方を用いる、とハンデルマンは述べている。「XがYである」かどうか、つまり命題が真であるか偽であるかについて端的に結論は出されず、むしろ可能性としての命題をできるだけ多く並置してゆこうとするのである。命題は差異をどこまでも認めながら自立性を保ち、相互に関連づけられながら共存する。神への近接的な接近を試みるユダヤ人は、可能的世界の描写を無限に重ねてゆくことで、神のことばを慎重に吟味するのである。

ただし、ハンデルマンは並置の論理の働く場については「純粹に言語面での類似点」、「ふたつの異なる個所に見られる類比的な表現」の間、²⁷と記してはいるが、事実上メトニミーを意味論のレベルでしか扱っていない。並行関係は類似する複数の言語構造が並置されたときに初めて見出されるのであるから、形式レベルでの議論は必須の課題である。そこで筆者は、メトニミーは聖書の至る所でみられる並行法（パラレリズム）の技法のうちに見いだされ得ると考えるのである。すでに述べたように、ザーガー（1970）は、ザックスがこの聖書の支配的文体であるパラレリズムを全面的に踏襲していることを指摘していた。事実、とりわけ 1940 年代に成立したザックスの初期詩集に、このパラレリズムの技法は集中的に用いられている。並行構造は連、詩行、構文、語句といった様々な言語レベルにおいて検出され、これらはザックスの詩におけるメトニミーの役割の重要性を示すのに十分であろう。ここで、筆者のメトニミー概念を明確に定義しておこう。

2.3 筆者のメトニミー定義

本稿において、筆者はメトニミーをユダヤ的思考原理の表れという観点からとらえる。すなわち、ある物事に対して発想の連続性をもって描写を並置、関連させ、物事の全容に近接的に迫る表現方法としてのメトニミーであり、筆者はとりわけこれを隣接する言語構造の構造的、意味的な並行関係のうちに見出そうと思う。現代の言語学において、メトニ

²⁷ ハンデルマン（1987）112 頁を参照。

ミーがレトリックの一技法としてではなく、意味生産にかかわる重要なファクターとして認識されていることは先に確認した。筆者もまた、コンテキストにおける新たな意味創出の場としてメトニミーをとらえる立場をとり、ある表現が本来どの実体を指していたかではなく、意味のズレのプロセス、指示作用の差異化の現象に焦点を当てる。したがって、この差異化のプロセスとしてのメトニミーは、言葉の意味あるい事象をある別の表現をもって代置する行為ではなく、隣接するパラレルな言語構造間の関係性として認識される。筆者のいう「隣接する言語構造」とは、前述の認知言語学が示すように、語と語の関係だけでなく、並置する様々の長さの語句や構文を含む。ザックスの詩作品において、こうした言語構造は詩行と詩行、連と連の関係として観察されることになる。そして、言述内における主語－述語の関係の規定から、並行する複数の言述間の関係性の観察へ論点を移行させるとき、メタファーのメトニミックな展開が、はじめて詩のダイナミズムとして見えてくるはずである。ザックスの詩から一例を挙げよう。第一詩集のなかに次のような詩行がある。„O DER WEINENDEN KINDER Nacht! / Der zum Tode gezeichneten Kinder Nacht!“ (FS010)。この隣接する二つの詩行はそれぞれ、語句を最大の言語単位としてそれ以上統語関係をもたない。どちらも *Nacht* という名詞にそれぞれ *Kinder* を含む名詞句によって前から修飾される構造であり、相違点は、最初の詩行の冒頭にある感嘆詞 *O* が次の詩行において消えていること、*Kinder* を形容する語句が *weinenden* という現在分詞から „zum Tode gezeichneten“ という名詞句を伴った過去分詞へ変化していることである。構造的にみるとこれら二つの詩行はヴァリエーションをもった反復であり、意味的にみると、子供が単に泣いている暗たんとした夜のイメージ（1行目）に、「死」という決定的な語が投入されること（2行目）によって子供たちの運命の暗さが益々強化される。各々の詩行を別々に観察するとき、*Nacht* とそれを形容する名詞句の結合は、両語句がともに暗たんとした類似的イメージをもつという点で、異なる二語の間に意味的類似性の認められるメタファーとして観察される。ここでは差異がまず先にありその間に類似の関係が見出される。しかし、分析の対象をこれら二つの詩行の関係性に移すとき、これらのメタファーが同様の構造をもって並行しそこに意味的隣接関係が見出されることから、子供たちの情況描写の積み重ねによって、彼らの恐怖と恐ろしき運命が近接的に描かれる。このように、メトニミーの分析は、パラレリズムともいえる複数の構造的類似のなかに、意味の差異性、多義性への傾向を見出していく作業なのである。次章では、ザックスの詩を実際に取り上げ、メトニミー分析モデルを提示したいと思う。

3. メトニミー分析モデル

第一詩集『死の棲家で』（1946年成立）の詩は、概してテーマが明確で、ジェノサイドの物と思われる犠牲者や加害者の像が中心に据えられている。ここでは、一つあるいは複数の人間の身体の部分、あるいはその所有物、属性、隣接状況を描写した文構造の並置

を、ザックスのメトニミー使用の特徴として挙げるができる。以下に第一詩集より三編の詩を取り上げ、メトニミー分析を行う。

O DER WEINENDEN KINDER Nacht!

Der zum Tode gezeichneten Kinder Nacht!

Der Schlaf hat keinen Eingang mehr.

Schreckliche Wärterinnen

Sind an die Stelle der Mütter getreten,

Haben den falschen Tod in ihre Handmuskeln gespannt,

Säen ihn in die Wände und ins Gebälk –

Überall brütet es in den Nestern des Grauens.

Angst säugt die Kleinen statt der Muttermilch.

Zog die Mutter noch gestern

Wie ein weißer Mond den Schlaf heran,

Kam die Puppe mit dem fortgeküßten Wangenrot

In den einen Arm,

Kam das ausgestopfte Tier, lebendig

In der Liebe schon geworden,

In den andern Arm, –

Weht nun der Wind des Sterbens,

Bläst die Hemden über die Haare fort,

Die niemand mehr kämmen wird.

FS010

おお、泣いている子供たちの夜！

死を刻印された子供たちの夜！

眠りはもはや入口をもたない。

恐ろしき女看守たちが

母親たちに成りかわり

その手の筋肉に偽りの死を張り

それを壁や梁へ種まく－

至るところで、恐怖の巣たちの中で孵化が始まる。

母乳の代わりにその小さきものを授乳するのは不安なのだ。

昨日はまだ母親が

白い月のように眠りを引き寄せた。
お人形は何度も口づけされ頬を赤らめ
片方の腕の中にあった。
ぬいぐるみは生き生きとなった
愛情を受け
もう片方の腕の中—
だが今や死の風が吹き
シャツを頭から剥ぎ飛ばし
その髪をとかす者はもう誰もいない。

この詩は二連構成で、連と連および各連中の詩行、語句の間に並置の論理が働き、詩全体が複数の言語レベルのまとまりによって有機的に関連している。第一連では、子供たちの死の世界、第二連では、彼らの平和な過去、そして再び現在の姿が描かれている。以下、各連内における詩行、語句の並行関係を順に記述する。

第一連では、感嘆詞 **O** と名詞句から成る „**O DER WEINENDEN KINDER Nacht**“（1 行目）と „**Der zum Tode gezeichneten Kinder Nacht**“（2 行目）が、類似構造を有し並置している。どちらも名詞 **Nacht** がそれぞれ **Kinder** を含む名詞句によって前から修飾されており、**Kinder** を形容する語句が **weinenden** という現在分詞から „**zum Tode gezeichneten**“ という名詞句を伴った過去分詞へ変化している。構造的にみるとこれら二つの詩行はヴァリエーションを有した反復であり、意味的には、単に「泣いている」子供たちの描写から「死」という具体的恐怖への言及と、暗澹たる情景の描写が二段階にわたって展開されている。3 行目において、この **Nacht** は **Schlaf** という意味的関連語に引き継がれる。**Schlaf** を主語とする文「眠りはもはや入り口をもたない」によって、眠りさえ子供たちにとって死の恐怖の逃げ道とならない状況の描写が続けられている。4 行目の名詞句 „**Schreckliche Wärterinnen**“ を主語として、5-7 行目に、完了の助動詞あるいは現在形動詞で始まる三つのパラレリズム „**Sind~, Haben~, Säen~**“ が現れる。行為の場所として前置詞句 „**an die Stelle der Mütter**“、 „**in ihre Handmuskeln**“、 „**in die Wände und ins Gebälk**“ がそれぞれ後続し、三つの文構造は並行関係を成している。意味的にも、この女看守たちによる三つの段階的行為はどれも死に結びつく極めて否定的なイメージを喚起し、生を脅かされた子供たちに隣接する情景描写の累積である。8 行目の文頭において、死の行為の場所は **Überall** へと汎化され、女看守たちの死の行為が構造的類似を伴ってとぎれることなく描かれる。植物に関するメタファー連鎖、さらには動物に関するメタファー連鎖へと、子供たちを取り巻く死に満ちた世界がメトニミックに展開する。続く 9 行目もまた、子供たちの描写に関連している。主語である抽象名詞 **Angst** が四格目的語として „**die Kleinen**“ をとっており、不安が子供たちを授乳する、という撞着的な表現によって、子供

たちを取り巻く倒錯した世界が表現されている。

第二連では、**Kinder** という語は出現せず、身体と隣接状況にまつわるメトニミーで不在の子供たちが描き出されている。今度は„Zog~, Kam~, Kam~“と過去形の動詞が文頭にきており、それぞれ対応関係にある主語 **Mutter**、**Puppe**、**Tier**、子供の身体の部分を表す前置詞句„In den einen Arm“、„In den anderen Arm“からなる三つの構造の並行関係が観察される。描かれているのは、第一連の子供の死と対極的な平和な過去の情景である。現在の悲劇と失われた過去の回想場面という時間的な前後関係が、連と連をつないでいる。第二連後半では、再び現在形で死せる子供たちが所有物と身体のメトニミーによって描かれている。「死の風が吹き抜ける」接点として、子供たちに属する **Hemden**、身体の部分 **Haare** が示されている。この現在形による死せる子供たちの描写もまた先行する過去形の描写と隣接しており、再び現在の場面に戻るという時間的関連がみられる。不在の子供たちをとりまく環境を何層にもわたってメトニミー的に描くことで、直接言及されない者たちの存在が詩中に浮き彫りになっている。

SCHON VOM ARM des himmlischen Trostes umfängen

Steht die wahnsinnige Mutter

Mit den Fetzen ihres zerrissenen Verstandes,

Mit den Zundern ihres verbrannten Verstandes

Ihr totes Kind einsargend,

Ihr verlorenes Licht einsargend,

Ihre Hände zu Krügen biegend,

Aus der Luft füllend mit dem Leib ihres Kindes,

Aus der Luft füllend mit seinen Augen, seinen Haaren

Und seinem flatternden Herzen –

Dann küßt sie das Luftgeborene

Und stirbt!

FS016

すでに天の慰めの腕に抱かれ

狂った母親は立つ

引き裂かれた理性のかけらをもって

焼き尽くされた理性の火口をもって

死んだわが子を棺に納め

失った光を棺に納め

両手を壺の形に曲げ

空気で子の身体をつくり
空気で子の両眼を、髪の毛を
そして震える子の心臓をつくりー

それから母親は空気から生まれた者に口づけし
死ぬ！

二連構成の詩全体が、連単位、および連内の詩行レベル、語句のレベルで並置の論理が働き、母親の像がメトニミーによって描かれている。第一連 2 行目と二行構成の第二連では、同一の主語 **Mutter** が、順に動詞 **stehen**（第一連 2 行目）、**küssen**（第二連 1 行目）、**sterben**（同 2 行目）を取り、狂える母親の死にいたる様子が段階的行為として描かれる。これら三つの文は、時間の推移を表す接続詞 **Dann**、**Und** によって結ばれており、連をまたいで並置の論理が働いている。狂気のうちにある母親は立ちつくし、口づけをした後、死に至る。さらに、二つの前置詞句 „**Mit den Fetzen ihres zerrissenen Verstands**“（第一連 3 行目）、„**Mit den Zundern ihres verbrannten Verstands**“（同連 4 行目）の並置において母親の理性の崩壊が、続く 5-10 行目の六つの分詞構文からなるパラレリズムにおいて狂える母親の様態描写が重ねられている。ここで四格目的語 „**Ihr totes Kind**“（同連 5 行目）は „**Ihr verlorenes Licht**“（同連 6 行目）に対応し、ともに現在分詞 **einsargend** が後置、さらに 7 行目では、四格目的語が „**Ihre Hände**“、現在分詞が **biegend** に変化し、母親の「両手」が、失われた子のために、架空の骨壺の輪郭を形作るという行為が描かれる。**füllend** をとる 8-9 行目の並行構造では、**Leib**、**Augen**、**Haar**、**Herz** といった、死せる子供の身体の部分が複数出現する。不在の子供の身体の部分が名指しされ、母親が空気でそれらをかたちづくる。失われた子の存在は、狂気の母親の理性によって想像される。しかし、この半ば幻想と混じった懸命の想起によっても、子供は決してその全容を現さず、あくまで身体の部分という断片描写の集積でしかない。構造的、意味的な差異化のプロセスにおいて、埋葬をまねる狂気の母親と不在の子供の像が近接的に描かれている。

AUCH DER GREISE

Letzten Atemzug, der schon den Tod anblies
Raubtet ihr noch fort.
Die leere Luft,
Zitternd vor Erwartung, den Seufzer der Erleichterung
Zu erfüllen, mit dem diese Erde fortgestoßen wird –
Die leere Luft habt ihr beraubt!

Der Greise
Ausgetrocknetes Auge
Habt ihr noch einmal zusammengepreßt
Bis ihr das Salz der Verzweiflung gewonnen hattet –
Alles was dieser Stern
An Krümmungen der Qual besitzt,
Alles Leiden aus den dunklen Verliesen der Würmer
Sammelte sich zuhauf –

O ihr Räuber von echten Todesstunden,
Letzten Atemzügen und der Augenlider *Gute Nacht*
Eines sei euch gewiß:

Es sammelt der Engel ein
Was ihr fortwarft,
Aus der Greise verfrühter Mitternacht
Wird sich ein Wind der letzten Atemzüge auf tun,
Der diesen losgerissenen Stern
In seines Herrn Hände jagen wird!

FS012

もう死の始まりを告げる
老人たちのひきとる息までも
おまえたちは奪い去った。
安堵のため息となって
この大地を吹き飛ばす
期待にふるえる
虚しい息ー
その虚しい息をおまえたちは奪ったのだ！

老人たちの
乾ききった瞳を
おまえたちはもう一度押しつぶした
そしておまえたちは絶望の塩を勝ち取ったー
この星が有する
あらゆる苦悶の屈曲は、

虫たちの暗い地下牢にあるあらゆる苦悩は
集められ山となったー

おお、真の死の刻々を奪うおまえたち
最期の息吹そしておやすみのまぶたを奪うおまえたち
これだけは確かだ

おまえたちが投げ捨てたものを
天使は集め、
老人たちの早すぎた真夜中から
最期の呼吸の風が現れ、
この引きちぎられた星を
主の御手へと駆ることだろう！

四連構成のこの詩は、第一連から第三連まで、連単位の隣接関係が認められる。第一連の最初の三行と第二連の最初の三行の間に並置の論理が働いており、第一・第二連を一まとまりとして、第三連へと関連してゆく。以下に、各連内部の詩行、語句レベルのメトニミーを含め、関係を記述する。

第一連 1-3 行目「老人たちの／ひきとる息を／おまえたちは奪い去った」は同連最終行において反復され、第二連 1-3 行目「老人たちの／乾ききった瞳を／おまえたちはもう一度つぶしたのだ」の並行構造へ関連している。老人たちそのものではなく、その身体の部分に焦点が置かれている。対応する単数名詞の四格目的語 *Atemzug* と *Auge* は、前に共通して所有格 „Der Greise“ および二格の形容詞 „Letzten“、„Ausgetrocknetes“ を伴い、その後、主語と述語の類似構造 „Raubtet ihr noch~“、„Habt ihr noch~“ が続く。最期の息を奪い去り、さらには瞳を押しつぶすという具体的な身体の器官の破壊。犠牲者である老人を襲う状況が具体的に描かれ、虐殺がその細部描写の累積として近接的に描かれている。さらに *Atemzug* は、続く 4 行目において形容詞を伴ったヴァリエーション „Die leere Luft“ と反復され、5-6 行目に修飾文を伴う。虚しい氣息は「安堵のため息」となり得なかった、殺戮による死の最期の息として、イメージ拡張されている。第二連 5-6 行目「この星が有する／あらゆる苦悶の屈曲は」と同連 7 行目「虫たちの暗い地下牢にあるあらゆる苦悩は」もまた、同格の主語を含む並行構造を成している。ここで、虐殺された犠牲の存在が *Greise* から „Alles~“ および „Alles Leiden~“ へ汎化されている。

第三連では、三つの名詞句 „echten Todesstunden“、„Letzten Atemzügen“、„der Augenlider Gute Nacht“ が並置され、*Atemzügen*、*Augenlider* が第一、第二連の *Atemzug*、*Auge* と対応する。老人たちを含むあらゆる存在の死が留まることなく換言され、虐殺に

よる死の瞬間に焦点を当てることで、恐怖のうちにある犠牲者がリアルに描かれている。

第四連では、犠牲者に代わって **Engel** が新たな主語となり、視点が転回するため、ここではもはや、犠牲者を描写の中心に据えた第一連～三連と同じ統語的、意味的パラレリズムはみられない。

4. 結論

20 世紀のユダヤ人大虐殺はいかにして描かれるのか。メタファーからメトニミーへ観察の視野を広げるとき、ザックスのメタファー研究史ではほとんど取り上げられることのなかったこの重要なテーマが浮かび上がる。克蘭ツ・レーバー（2001）は「ザックスの叙情詩におけるショアーの描写の問題に断固として取り組んだ研究はほとんど存在しない。これは本当に驚くべき現象である」²⁸と述べているが、そもそも、こうしたテーマを論じるには、詩の内部に見出される形象間の関係や解釈ばかりを問題にする従来のメタファー研究では不十分だったのである。筆者は本稿序論で、20 世紀ユダヤ人大虐殺による犠牲者を前に「塵となったものたちの痛みを知り尽くし、光で照らすこと」を創作の使命としたザックスが詩の言葉でいかにしてその使命を果たしたのかという問題を提起したが、メタファーではなくメトニミーに注目した分析こそ、ザックスによるジェノサイドの効果的かつ適切な描写方法を解明することにつながるのではなかろうか。死は決して抽象化されず、母と子といった身近な存在に起こる出来事の側面的描写が、構造的類似を伴いながら集積してゆく。「両手を壺の形に曲げ／空気で子の身体をつくり」（FS016、第一連 6-7 行目）。描かれるのは、何百万という人命の剥奪ではなく母子という一对の被害者の断片的様態である。にもかかわらず、死は強烈なリアリティーを持って迫ってくるのである。ザックスは、今や不在のものとなった犠牲者らについて、その身体の部分や所有物、属性、周辺状況を多層的に描写することでその全容に近接的に迫っている。直接言及されない身近な者たちの存在は、構文や語句、詩行の並置のなかに具象のことばの累積として見出される。また、こうした描写のあり方は、ユダヤ的思考の根本原理としてその原型を旧約テキストのなかに見出した、ハンデルマンのメトニミー理論に合致するものであった。

今後、本稿で示したメトニミーの分析モデルを基に、詩の分析を重ね、ザックスにおいて並置の論理に基づいたメトニミーが、ジェノサイドの描写に強烈なリアリティーを与える重要な手法として機能し、彼女がきわめてユダヤ的な方法で自らの民族の受難を描いていたことを明らかにしてゆきたい。

*本稿は、筆者の博士論文の一部を要約、加筆したものである。

（2007 年 12 月、北海道大学大学院文学研究科博士課程修了、同科専門研究員）

²⁸ Kranz-Löber, Ruth (2001) S. 15.